

目次

94	天台智顓における一乗思想の展開	田村完爾	一
95	天台智顓と六即	宮部亮侑	二
96	智顓における一乗	柏倉明裕	一八
97	智顓における「本有」の概念	潘哲毅	二二
98	『天台法華疏義續』における『法華文句記』批判について	松森秀幸	二七
99	『大阿弥陀経』における「斎戒清浄」	肖越	三三
100	『賢愚経』「出家功德尸利苾提品」と『出家功德経』	三宅徹誠	三七
101	中国南北朝仏教における一乗思想——『涅槃経』を中心として	藤井教公	四五
102	隋末の「弥勒出世」を標榜した反乱について——発生時期が意味するもの——	藤井政彦	五三
103	唯識三転法輪説が想定した初時外教の意義	橘川智昭	五九
104	——『解深密経』・円測『解深密経疏』を手がかりとして——	陳宗元	六五
105	基の『成唯識論述記』における清弁の批判について	伊藤真	七一
106	李通玄による五種の初発心の説について	岡崎秀磨	七五
107	善導『往生礼讃』における一行三昧について	加藤弘孝	七九
108	『念仏三昧宝王論』の撰述年代について	金炳坤	八三
109	法華章疏における五分釈の展開	加藤正賢	八七
110	宋代における懺法の実修——北宋期初頭の懺法を中心として——	椎名宏雄	九一
111	『緇門警訓』の文献史的考察	木内堯大	九九
112	初期日本天台における三車四車諍論について	松本知己	一〇五
113	証真の教学における三種三観について	真野新知也	一一一
114	栄西の菩提心戒について——台東両密との関係から——	大鹿真央	一一五
115	覚鑊の教学に見る教判論——第八住心を中心に——	龜山隆彦	一二九
	中世真言宗における命息思想の展開——『宗骨抄』を中心に——		

116	泉宝説『伝宝記』と『開心抄』——泉宝の禅宗批判の教学的背景	千葉 正	一一三
117	宥快の菩提心観について	林山まゆり	一一九
118	十住心批判に対する東密側の反論について	橋本文子	一三四
119	永観の著作から見た臨終行儀	舍奈田智宏	一三八
120	源俊房の往生と作善	田中夕子	一四二
121	聖光『浄土宗要集』における本願と行について	郡嶋 昭示	一四七
122	——第四十七から第七十算題の構成をめぐって——	南 宏信	一五一
123	良忠撰『往生要集鈔』から『往生要集義記』への成立過程	檀王法林寺蔵袋中手扱本を中心にして	一五六
124	悪人正機説と悪人正因説——平雅行氏の所論を縁として——	紅 椽 英 顕	一五六
125	和語聖教（書簡）にみる親鸞の念仏思想	岡 宏	一六四
126	——「かさまの念仏者のうたがひとわれたる事」の検討を中心として——	黒 田 浩 明	一六八
127	親鸞の学的方法論——重釈要義について——	紫 雲 龍 教	一七二
128	親鸞の罪惡観に関する表現とその意義	龍 口 明 生	一七六
129	妙好人の言動と真宗聖教	石 井 義 長	一八四
130	『正法眼蔵』「現成公案」の説示について	宮 地 清 彦	一八九
131	『伝光録』における枯木死灰禅の用例について	伊 藤 秀 真	一九六
132	——中国禅思想との関連から——	澤 野 純 一	二〇〇
133	宝慶寺世代の法系と末寺の関係	古 瀬 珠 水	二〇四
134	鈴木正三における「恩」の思想と「娑婆」世界	三 浦 和 浩	二〇八
135	金沢文庫蔵『見性成仏論』と伝達磨大師『血脈論』	前 川 健 一	二二二
	——「見性」の思想に着目して——	小 西 顕 龍	二二八
	『立正安国論』における「善」の意義——「実乗の一善」の解釈をめぐって——		
	日蓮遺文「南部六郎三郎殿御返事」小考		
	慶林坊日隆における「法度」の一研究——四条門流との関連について——		

147	ジャイナ教における布薩の概念 —— シュラーヴァカ・アーチャラー文献の記述を中心として ——	堀田和義	八四五
146	—— ジャイナ教白衣派古聖典の本文の伝承 ——	渡辺研二	八四〇
145	アーガマにおける tri-yoga の定型表現	山畑倫志	八三三
144	韻律分析によるアパブランシャ語の格形式の確定	中村史	八二八
143	『マハーバーラタ』第13巻第1章の考察 —— 運命と行為 ——	森真理子	八二一
142	古典インドに於ける呪詛と懐胎 —— 「シャーリーラスターナ」を中心に ——	森口眞衣	八一七
141	古代インド医学書における「精神の病的状態」 —— Vādhānva IV 4 : 犠牲獣神話の考察 ——	大島智靖	八一〇
	Vādhūla-Anvākyāna の伝える潔斎の特徴		
	第61回学術大会パネル発表報告		八〇四
	日本学術会議だより		七九六
	情報提供のお願い		七九五
	掲載されなかった諸氏の発表題目		五二、一四二、二二七、三三〇、八四一、九一九、九二四、九四三
140	類書を典拠とする『金言類聚抄』所収話	松村恒	二四三
	前田惠學博士を偲ぶ	藤田宏達	二五一
	三枝充恵教授を偲ぶ	川崎信定	二五五
	訃報		二五九
	—— 小川泰堂著『日蓮大士真実伝』を中心に ——	望月真澄	二三五
139	幕末・維新时期における日蓮伝記本の一考察	興津香織	二三一
138	西教寺慧海潮音 —— 江戸後期の学問的交流と功績 ——	柴谷宗叔	二二六
137	江戸時代前期の四国遍路模様 —— 澄禪『四国辺路日記』を中心に ——	武田悟一	二二二
136	日蓮宗教学史における長松日扇の一考察		

148	六主張論議と審判・会衆の役割——ニヤーヤ学派の新解釈——	小野卓也	八五〇
149	色 (rupa) は物質ではない——仏典における原意と訳語の考察——	村上真完	八五八
150	潜在自我意識 (papañca) と認識 (sañña) の転換 —— Athakavagga の記述による——	中谷英明	八六八
151	「両極端を自証して中間にも汚されない」という意味 —— Tissametteyyamañāvapucchā より——	岸本正治	八七三
152	阿含・ニカーヤにおける現観	金敬姫	八七八
153	阿羅漢の智慧と仏陀の智慧——初期仏典から大乘仏典へ——	馬場紀寿	八八五
154	ジャータカ (Jataka) ・アヴァダーナ (Avadana) における捨身供養 ——北西インドの「月光王本生」を中心として——	栗原正和	八八九
155	ブツダゴーサ作品と「ニダーナカタター」における入胎の記事の相違 ——註釈書的要素に注目して——	越後屋正行	八九三
156	『ダンマパダアッタカタター』における在家阿羅漢についての一考察	香月拓	八九八
157	後代パーリ仏教の世界に与えた Lokappadīpakasāra の影響 —— Cakkavāḍīpani, Lokasanihārajaratamaganhi および Lokappadīpakasāra を引用を中心として——	CHAITONGDI Phrachapong	九〇二
158	「婆沙論」の構造分析における留意点	佐々木閑	九一一
159	「九遍知」の一考察	周柔含	九一八
160	「得」から「種子」へ	飯岡祐保	九二三
161	『八千頌般若』の発生基盤——般若経類の始原にあるもの——	阿理生	九二九
162	『十地経』における adhishtāna (加持) の諸相——第十地を中心として——	平賀由美子	九三四
163	『法華経』「方便品」の二二の偈頌について ——テキスト校訂の問題を中心に——	岩松浅夫	九四二
164	梵文『法華経』と『妙法蓮華経』	久保継成	九四七
165	『金光明経』の研究——「最浄地陀羅尼品」の構造について——	ウルジジャルガル	九五一
166	高貴寺蔵梵文『般若心経』について	奥風栄弘	九五五

167	新出『中論頌』の系統をめぐって……………	斎藤明……………	九六四
168	『根本中頌』に現れる実体の概念及びそれについての批判……………	李泰昇……………	九七〇
169	法界現量について——初期唯識思想と独我論……………	源重浩……………	九七五
170	『解深密経』における二種類の勝義無自性解釈について……………	加藤弘二郎……………	九八一
171	Prajñākara Gupta における言葉の意味論……………	裴慶娥……………	九八五
172	<i>Mañjuśrīmūlakapā</i> 第9章の成立に関する一考察……………	大塚恵俊……………	九八九
173	——義浄の関連典籍を通じた視点から……………	SHAKYA Sudan……………	九九五
174	Yasuntharā と Yasudhāra ……………	西沢史仁……………	九九九
175	チャパ・チューキセンゲのゴク翻訳官批判——認識手段性の確定をめぐって……………	山本幸子……………	一〇〇三
176	カワカルポの聖地誌の研究……………	石部道明……………	一〇〇七
177	『ガリム』における究竟次第について……………	伊藤千賀子……………	一〇一四
178	——菩提心思想と解脱・輪廻のあり方を中心に……………	島村大心……………	一〇二〇
179	天台「如来性悪説」の真意——新しい視点からの説明……………	崔恩英……………	一〇二六
180	初期中国仏教における小乗仏教の受容について……………	中西俊英……………	一〇三〇
181	——吉蔵の正量部に対する解釈を中心として……………	小林圓照……………	一〇三九
182	天竺寺法誥の教学とその背景——『梵網経疏』断簡を中心に……………	定源(王招国)……………	一〇四三
183	敦煌写本〈悉曇章〉類の特異性——『禅門悉曇章』のテキスト研究……………	韓普光(秦植)……………	一〇四九
184	敦煌本『御注金剛般若経宣演』の復元について……………	陳永裕……………	一〇五六
185	朝鮮、静観一禪の浄土観について……………	若江賢三……………	一〇六三
186	華嚴経に見られる中道の論理——華嚴経と新羅の義湘……………	林敏……………	一〇六八
187	花押による日蓮遺文の系年研究——(248) 兵衛志殿御返事を中心として……………	木内英実……………	一〇七四
	日本古写経本『続古今訳経図紀』の発見とその意義……………		
	——『首楞嚴経』に関わる記述に着目して……………		
	中勘助の「犬」における「マハーヴァンサ」の影響……………		